

象の頭脳と左前足

「象」と言えば、黙っていてもあの愛嬌のある大きな動物を思い浮かべることができる。力強く愛らしく子どもたちにとっては、パンダと並んで最も人気のある動物のひとつである。ところが、人間だって「ウドの大木」とか、「大男総身に知恵が回りかね」と比喩的に言われるように、一般的に身体の大きい動物はつい頭脳の働きも鈍いと思われがちである。

それがどうしてどうして、この力持ちの象は人間の言うことが分るうえに働き者だから、屋外の大きな作業や力仕事の労働現場では、なくてはならぬ存在として、ビルマやタイの山間では労働力として随分重宝がられている。トラクターや大型機械などが入り込めないような森林地帯や山間部では、象の獅子奮迅の働きなしには作業も進まない。

先日タイの東北部チェンマイで象による特異な芸術的特技がテレビで披露された。何と驚くなかれ、一頭の象が長い鼻で絵筆を揮い画用紙に、画家顔負けの一級品の自画像を描いたのである。それはショーとしても多くの観光客から賞賛と感動を呼んだ。しかも心憎いことに自画像に一輪の花まで描き添えたのだ。果たして象にこんな繊細な芸術的才能があるのかと半信半疑の気持ちにも駆られる。件の象は相変わらず絵筆を揮って、毎日1枚ずつひたすら絵を描き続け、今でも観光客を喜ばせているようだ。

ところで、象の木彫りでも、銀や錫からなるミニチュアでもよいから、置物としてひとつぐらいご家庭にお持ちだろうか。それらのミニチュア象をとくと観察していただきたい。

きっと左の前足が一步前に踏み出ているはずである。普通象はどういうわけか決まって左足から踏み出すのである。だから、例えミニチュア品であっても彫り物師は、自然左足を踏み出した象を彫る。観光客も左足を踏み出している象を買い求める。かりに右足が一步前へ出ているミニチュア象があったら、残念ながらそれは象ではない？ それは象が凜々しい動作を開始する最初の瞬間ではなく、ただただ歩いている象だと納得した方がよい。左足が出るか、右が出るかによって、自ずから品格が違うのである。嘘だと思ったら、一度サファリへでも行ってみるか、自然動物園でも見学されたら分る。

(近藤)